



東浦町郷土資料館（うのはな館）

東浦町郷土資料館は、平成11年11月に開館し、展示を通じて郷土“東浦”の歴史や文化財の情報発信活動を行っています。開館から20年ほど経ったことから、令和元年（平成31年）3月に常設展示のリニューアルを行いました。

徳川家康の生母・於大の方をはじめ、東浦の戦国時代を語る上ではなくてはならない緒川城主水野氏と、その氏寺乾坤院に関する資料やパネルを新しい展示の中心とし、他にも東浦の遺跡から現代までの主な歴史を概観できるような展示内容としました。

また、年間を通して企画展を開催し、全国的には取り上げられない東浦の歴史を発掘し、広く紹介しています。規模は大きくはありませんが、地道に調査・展示活動等を行い、地元の人々をはじめいろいろな方に親しみをもってもらえる資料館を心がけています。

目 次

●令和元年度 第44回東海三県博物館協会研究交流会の報告	2
●令和元年度 研修会の報告	
部門別研修会 1・共催事業 シンポジウム 災害と文化財・地域文化	4
愛知県博物館等職員研修会	6
●表紙館のご紹介	10

第 44 回 東海三県博物館協会 研究交流会の報告

令和元年 11 月 6 日に、第 44 回東海三県博物館協会研究交流会を開催した。その状況について報告する。

本研究交流会は、斎宮歴史博物館を会場に、「博物館と観光のちょうどいい関係」をテーマとして開催し、合計 46 名（うち愛知県 13 名）が参加した。

〈開催日時〉令和元年 11 月 6 日（水） 10 時 15 分～16 時 55 分

〈会 場〉本居宣長記念館・松阪市歴史民俗資料館（見学会）、斎宮歴史博物館講堂（研究会）

〈内 容〉

○本居宣長記念館見学 10:15～10:55

○松阪歴史民俗資料館見学 11:00～12:00

○あいさつ 13:30～13:35

三重県博物館協会会長 小林秀樹氏（亀山市歴史博物館館長）

○事例発表 13:35～16:05

報告 1 「伊賀の忍者観光と博物館」

〈三重県〉幸田知春氏（伊賀流忍者博物館 学芸員（館長補佐））

報告 2 「観光施設としての博物館」

〈愛知県〉小野木克充氏（博物館明治村 学芸・催事担当主任補佐）

報告 3 「奥の細道むすびの地記念館と観光」

〈岐阜県〉上嶋康裕氏（奥の細道むすびの地記念館 学芸員）

○質問・討論

司会 奥野実氏（伊勢市教育委員会事務局文化振興課 主幹（学芸員））

○閉会あいさつ 16:05～16:10

○施設見学 16:10～16:55

特別展「東雲の斎王 大来皇女」（斎宮歴史博物館）

解説 岸田早苗氏（斎宮歴史博物館 学芸普及課 課長代理）



本居宣長記念館にて



質問・討論の様子

（右から、上嶋氏、小野木氏、幸田氏、奥野氏）

〈概要〉

まずは、小林氏より研修テーマである「博物館と観光のちょうどいい関係」について説明があった。各博物館がそれぞれに行っている観光に向けた取り組み、工夫を共有することが今回の研修の目的である。

報告 1 について、伊賀流忍者博物館の幸田氏より事例報告があった。もともと地域おこしのために作られた忍者屋敷である当館は、伊賀上野観光協会が直営しており、学芸員は 2 名である。施設は忍者屋敷、忍者伝承館、忍術体験館からなる。平成 9 年に伊賀流忍者の HP を開設し、半数以上のアクセスが海外からのものだった。平成 20 年から海外誘客プロモーションを開始し、伊賀忍者特殊軍団「阿修羅」は常設展だけでなく海外でも忍術実演ショーを行っている。インバウンドの入館者数は増加しており、特にアジア圏の観光客が多い。スタッフは、①出身地を訪ねる②指さし確認シートを使う③お客様にあわせたパンフレットを手渡す④お客様の言語に合わせた案内をする、以上の四段階の案内を行っている。今後は、キャプション・掲示物の多言語化に努めるほか、お客様の「Ninja」イメージをくみ取り、正しい忍者像をお伝えし、他の文化財や施設にも足を運んでいただくことが目標である。

報告 2 について、博物館明治村の小野木氏より事例報告があった。明治村の入村者数の動向は 2000 年以降約 40 万人で推移しており減少傾向にある。近年、催事の充実を図り、団体、個人、インバウンドに向けた取り組みを実施している。団体向けにはタブレットを利用した、「リアル人生ゲーム」「めいじのい・ろ・は」といったコンテンツを作成した。個人向けには謎解きイベントや、漫画やアニメとのコラボ企画展を実施している。インバウンドは増加傾向にあり、ボイスペンをかざすとガイドを聞くことができる特別な村内マップは五か国語に対応し、英語話者には冊子を配布している。貴重な文化遺産を後世に伝えることが博物館の重要な使命だが、建物の老朽化による修繕費用の増加、経年劣化による水道・電気などのライフラインの修繕費用の増加といった課題がある。その課題解決の一つの手段として博物館の集客観光施設化を目指している。

報告 3 について、奥の細道むすびの地記念館の上嶋氏より事例報告があった。大垣市の直営である当館は、大垣城や郷土館、大垣市歴史民俗資料館など多くの文化施設が存在する大垣に、市街地活性化の中心として平成 24 年に新たに作られた。来館者数は大垣市のイベントに左右される傾向があるため、企画展の会期もそれに合わせている。枡を使った共通の通行手形で 8 か所の文化施設と 37 店のおもてなし店でサービスを受けられるイベントや、子供向けに寸劇なども行っている。記念館に来ることを目的にした来館者ばかりではないため、魅力的な話をする必要がある。また、地域活性化の中心となるためには、地元民との信頼関係を築いていくことが重要である。

質問・討論では、他館が取り入れられるようなインバウンドを対象とする具体的な取り組みについての質問や、エンターテインメント性と博物館としての意義の線引きをどこに置くかという質問など、インバウンドの誘客について活発に議論がなされた。また、観光協会との協力の重要性について積極的な意見交換が行われた。

なお、次年度の東海三県博物館協会研究交流会は、愛知県博物館協会が開催県である。

(由良濯、愛知県美術館 学芸員 / 愛知県博物館協会 事務局)

部門別研修会1 「被災文化財保存処理ワークショップ」

令和元年9月21日（土）に名古屋市博物館にて部門別研修会1「被災文化財保存処理ワークショップ」が開催された。

東日本大震災以降、博物館や文化財行政においても、災害時の資料保全に対する関心が高まっており、当地の学芸員にも一層の理解が求められている。

今回の研修は、文化財保全のスキル向上を目的として企画。講師に陸前高田市立博物館 学芸員 浅川崇典氏を招き、海水損した資料に対する応急処置方法について、レクチャーを受けた。陸前高田市立博物館は平成23年に発災した東日本大震災で、建屋全体が津波に襲われ、収蔵資料の大半が海水損した。現在は海水損資料を本格的に修復する前段階で行われている、「安定化処理」の技術構築に積極的に取り組んでいる。

浅川氏には、海水損した紙資料に対する応急処置についてご指導いただいた。筆で土砂を払いながら資料を何度も水洗し、有機質を除去していく作業を体験。特別な技術や設備はなくとも取り組める方法であるため、参加者の多くが、災害時にも迅速に対応できる手ごたえを感じたのではないだろうか。ただ、水洗できる紙資料は、墨や油分を含む物質のもので作られたものに限られており、水溶性のインクが用いられている資料については未だ技術開発が追い付いていない課題も示された。実際に様々な塗料を水洗して溶解状況を体感したことで、緊急時においても瞬時に塗料の成分を見極め、適切な処理を考えていく重要性が理解できたと思う。

後半は、超音波洗浄機を用いて金属資料の安定化処理のデモンストレーションが行われた。超音波洗浄機は短時間で効率的に資料を洗浄できる有用性は認められるところではあるが、高額機器を導入する難しさも痛感した。

本研修は、実技を伴うこともあって、参加者数を制限せざるを得ず、やむなく参加を断念したという声もあった。参加者だけにとどまらず協会全体で今回の研修内容を共有し、緊急時に応用できるよう対策を考える必要がある。



紙資料を水洗し、脱塩する作業を行う参加者



水溶性のインクについてレクチャーする浅川氏

部門別研修会開催日と同日、名古屋市博物館と共催でシンポジウム「災害と文化財・地域文化」を開催した。これは、名古屋市博物館で開催中の特別展「伊勢湾台風 60 年事業 治水・震災・伊勢湾台風」で取り上げた内容と近年愛知県博物館協会が力を入れている災害対策と趣旨が合致したため、共催する運びとなった事業である。本事業は、「災害時にいかに文化財や地域文化を守り、伝えていくか」という視点に基づき、講演会とディスカッションで構成した。

前半は、陸前高田市立博物館 主任学芸員 熊谷賢氏の講演を開催。博物館が人を育てる、人に育てられている存在であることや、博物館資料の保全が復興に果たす役割についてご講演いただいた。陸前高田市立博物館が掲げるスローガン「文化財が残らない復興は本当の復興ではない」は、聴講者の心に深く刻まれたことであろう。

後半のディスカッションでは愛知県内の文化財保全活動に携わるパネラーから、現在の活動状況についての発表をして頂いた。近藤佳世氏（愛知県文化財保護室）からは、愛知県教育委員会で取り組んでいる文化財の悉皆調査の基礎データの整備や、国立博物館からの助言指導を得ながら「文化財防災ネットワーク」を構築していく取り組みについての発表があった。次に篠宮雄二氏（中部大学人文学部）からは、専門家や市民が協同して災害時における歴史資料の保全活動を行う「東海資料ネット」設立に向けた取り組みと意義について語られた。鈴木雅氏（名古屋市博物館）からは、特別展の意義に触れながら、災害の記録や記憶を留める文化財を次世代へ継承していく重要性についての意見が寄せられた。愛知県博物館協会の田村哲氏（愛知県陶磁美術館）からは災害発生時における支援活動を行うためのネットワークを構築する取り組みが紹介された。最後に陸前高田市立博物館の熊谷氏・浅川氏を交え、今後の活動展望や文化財が地域文化を保全していく上で重要な役割を果たしていることを市民に対して発信し、ディスカッションの総括を行った。

協会での取り組みはもちろん、愛知県内での文化財保全に関する活動を市民と共に共有できた。一方で、それぞれの活動が独立していることもあって、相互連携に関しての課題も示された。未曾有の事態に対して日ごろから県内で結束し、連携体制を考えていく必要性を改めて認識させられた会となった。

（星子桃子、名古屋市博物館 学芸員）



ディスカッションの様子（左から近藤氏、篠宮氏、鈴木氏、田村氏、熊谷氏、浅川氏）

令和元年度愛知県博物館等職員研修会は令和元年12月12日(木)愛知県芸術文化センター12階アトスペースAにおいて開催された。「博物館⇔教育機関 連携の取り組み」をテーマに講演と3館の事例発表を行い、57名が参加した。はじめに愛知県美術館副館長 古田浩俊氏より研修会開催のご挨拶を頂いた。

講演 「学校と博物館 そのよりよい利用のために」

講師：可児光生氏(美濃加茂市民ミュージアム館長)

美濃加茂文化の森美濃加茂市民ミュージアム(以下ミュージアム)の可児館長よりミュージアムの実際の活動をご紹介いただきながら、博物館と学校の連携について目指すもの、今後の課題など幅広いお話を頂いた。



可児光生氏

ミュージアムは17年間の準備期間を経て2000年に開館した美濃加茂市直営の総合博物館である。理念に「自然との共存」、「学校教育との連携」、「市民参画」、「地域づくり」を掲げ、ミッションを明確にして活動しているため、設立から約20年経った現在も細かな運用の変更はあるものの、発見や気づき、感動を得ることができる様々な「学びの場」としての活動を実践している。現在は地域のボランティアなども得て、多くの人に「学びの場」として認知されている。

中でもミュージアム設立時には市の教員に博物館への要望の聞き取りをするなど、学校教育との連携を重視した設立経緯があり、特に充実した小学校との連携をご紹介いただいた。

美濃加茂市内の小学校の生徒は年間カリキュラムに基づき授業の教科としてミュージアムへ6年間で12回来館する。また、総合的な学習の時間にとどまらず社会科や生活科、理科、国語科、図工など多岐にわたる教科の授業として様々な体験活動を行っている。このことは総合博物館だからこそ可能とも言えるが、学校側からもミュージアムでの活動を自由に教材化しようという意欲の結果でもある。このような相互連携の姿勢は、ミュージアムを活用する市内の教員によるプログラム検証・開発、教員研修や学校活用の改善要望の聞きとりなどが毎年行われ、培われているものである。

体験活動を行う際の事前打合せには教員全員の参加を要請し、毎回個別の活動案を作成、学校側では事前学習を大切にするなど、互いが主体性を持つように連携が図られている。ミュージアムでの活動後は関わったスタッフや教員が振り返りや評価を行ない、多くの活動実績やその中で得られた気づきを次の活動に活かす体制がとられている。

ミュージアムでの学校との連携の実際につき、博物館がもつ学校教育とは違う学びについて考えるお話をいただいた。博物館で体験活動を行う目的は実物資料や博物館という場を使い、五感を使う多様な気づきを学んで得てもらうことである。博物館での学びは、プロセスや多様な考えを重視した長期的な視点に立ったもので、五感を使った活動による様々な発見・気づき・感動を、好奇心や考えることを引き出すことへと繋げてゆくことが必要である。そのことが一人ひとりの主体的な思考へと繋がり、「気づく」ことが自らの考えを“築く”ことへ発展してゆく。

美濃加茂市の小学生へ博物館での学びを提供するミュージアムでの活動は、子ども達が学校を卒業した後にミュージアムでの体験活動がこの地域ならではの特別なことであったことに気づき、ミュージアムを地域の誇りと認識するようになることである。一方で、ミュージアムを小学校で連れられて行った学習施設として捉えるイメージが出来てしまい、大人になってから個人的に訪れる施設として認識されていないとい

う問題をご紹介いただいた。大人になってもミュージアムを自由に利用する場所として認識を持ってもらうためには、大人が楽しんで利用している姿を見てもらうことが重要であるとお話もあった。

博物館の学びの受け手は、学習活動を通して学ぶ子どものみならず、子ども達を取り巻く教員や保護者も対象である。保護者や家族での学びが、子どもたちの学びをさらに発展させたり深めたりすることにつながるというお話や、一見学校の授業で行う体験活動と直結していないようなことであっても、長期的な考えを築くための大切な気づきとなる要素が博物館の活動に潜んでいるというお話は印象的であった。

続いて来年度から変更となる小学校学習指導要領の新旧での比較をご呈示いただき、新しい学習指導要領には博物館が“資料を活用した情報の収集”をする場所として位置付けられており、博物館が“実感し学ぶ”場所である実際と新要領で求められる役割との乖離についてご指摘があった。

今回の講演で、ミュージアムが博物館からの“押し付け”や学校からの“丸投げ”ではなく、「学校教育との連携」についての理念・基本方針を学校現場と共有して“フラットな連携関係”を築いているお話などを伺うことができ、学校教育との連携における博物館の存在意義や役割を考える貴重な機会となった。

事例発表1「場・アイデア・人のひろがり—学校と美術館の連携」

藤島美菜氏（愛知県美術館主任学芸員）

愛知県美術館では学校と連携したプログラムを数々実施しているが、中でも鑑賞学習交流会、鑑賞学習ワーキンググループ、美術館が行う教育プログラムについてご紹介いただいた。



藤島美菜氏

鑑賞学習交流会、鑑賞学習ワーキンググループといった、愛知県美術館と教員との交流や教員同士の交流などで生まれたアイデアや工夫が鑑賞補助ツールを生んだり、愛知県美術館での鑑賞プログラムにも活かされたりするなど美術館と教育現場との双方向で影響を与えている。

これらの場で生まれたアイデアやプログラムを活かし開発された鑑賞補助資料「あいパック」、「あいパックプラス」は学校の授業で使用され多様な鑑賞学習法に結びついている。「あいパック」を利用した鑑賞学習の授業の動画も紹介され、鑑賞の仕方のみならず、子どもたちが自分の

感じたこと思ったことを話すことで人によって感じ方が違うことを知り、そのことが子ども同士のコミュニケーションを生むきっかけとなっているということが印象的であった。

日常の授業で余裕が無く、美術館まで鑑賞に訪れることが難しい学校であっても、工夫次第で鑑賞学習は学校でも行うことができる。その際、学習のアイデアや工夫の成果を形にしたプログラムや教材を使用すれば、鑑賞学習の研究を通して生まれたアイデアや工夫を活用することができる。

また、教員向けの研修会では、美術だけでなく他科目の教員も参加するなど教員間の交流が生まれ、学芸員や学生、小中校の教員のみならず大学教員も参加するなど分野を超えた交流の場となっているとのご紹介もあった。分野を超えた教員同士や美術館をつなぐ交流会で美術館と学校教育の現場が相互に影響を与え合い生まれた研究やプログラム、補助教材などのご紹介は、美術館・博物館と学校だけに留まらない新たな展開を生み出す可能性を感じるものであった。

事例発表2「博物館と小学校の連携—『出前歴史セミナー』を中心に—」

星子桃子氏（名古屋市博物館学芸員）

名古屋市博物館で平成15年から実施している「出前歴史セミナー」についてご紹介いただいた。



星子桃子氏

これは名古屋市教育委員会が学校現場で外部人材を活用する目的ではじめた「その道の達人派遣事業」の一環として実施されているもので、学芸員が学校へ出向き授業を行う出前授業である。専門知識を持つ学芸員が小・中学校へ出向き館蔵の資料を用いて名古屋の歴史を紹介している。

出前授業には、「名古屋のまつりとからくり人形」、「合戦における火縄銃」、「学区の遺跡博士になろう」、「東大寺に行くナラ」と4つのプログラムがあるが、それぞれにマニュアルがあり、学芸員の分野に関係なく誰でも実施可能な体制となっている。

本出前セミナーを利用できるのは名古屋市内の学校で、名古屋市教育委員会から専用回線で名古屋市内の学校へ出前授業プログラムの案内があり、学校から博物館へテーマを選んで申込みをする流れとなっている。出前授業を行う際には担当学芸員と役職経験者の教員OBが組となって取り組む。教員OBは学芸員に教員が持つスキルの伝授や日程調整などを行う。授業では体験用の資料を多く使うが、今回ご紹介いただいた火縄銃の授業では本物の資料を使うため、構造や取り扱いの注意点などに多くの時間を使うということであった。出前授業の後には教員からアンケートを回収し、要望や改善点等を確認している。

過去4年は年間の出前授業の出動は25、6校と、学芸員の派遣に限りがあり、市立小学校261校のうち1割程度しか対応できないことが問題となっている。その他、プログラムにより応募にムラがあること、一部の学校や教員にしか浸透していない、学習指導要領に対応しているプログラムは要領の変更により内容を変更する必要があるなどの問題点をあげられた。今後は学校に対する広報や職員の運用の見直し、プログラムの改善や発案などの課題に対応してゆきたいとのお話をいただいた。

学芸員が実物資料を持って学校へ出張するという、博物館にとっては負担の大きな事業であるがゆえ、それを実行する体制や運用の仕方、抱える問題点などを詳細にご紹介いただいた内容は、学校との連携活動を考えるうえで大変参考になった。

事例報告3「新城市の小中学校と博物館の連携」

西村拓真氏（鳳来寺山自然科学博物館学芸員）

鳳来寺山自然科学博物館での小中学校との連携についてご紹介いただいた。

新城市には「^{ともい}共育」という教育理念があり、「学校」を拠点に「学校・家庭・地域」が総ぐるみで「自然・人・歴史文化」の故郷の三宝を活かし「共に過ごし共に学び共に育つ」活動を創造し「感動・創造・貢献の喜び」を共有して「自他の幸福」と「地域の元気」を築くこと、とされている。

新城市ではこの「^{ともい}共育」という理念のもと、地域の豊富な資源を活かした博物館と小中学校との連携授業が行われている。鳳来寺山自然科学博物館と小中学校との連携授業では、一方的な博物館からだけの働きかけではなく学校との相互連携を大切にしているとのことで、例として教員からの要望を受け市内の地層を見学したり、地域の歴史もフィールドワークをしながら学んだりすることのご紹介があった。その際、地元にある商店を訪ねたり、地主の了承を受けているため子供たちが自ら地面から化石を採掘したりといったことが行われ、博物館と学校の連携教育が地域の信頼関係によ



西村拓真氏

て魅力的なものとなっている。

連携授業には、子供たちが地域への誇りをもつきっかけとなる身近にある宝を紹介する大切な役割があるとの話から、新城市の「共育」という教育理念を鳳来寺山自然科学博物館が学校や地域と共有していることが強く感じられた。博物館と教育現場のみでなく、商店や地域住民も参加し地域が一体となって子どもたちの教育に関わる力強い連携の一例を伺うことができた。

今回の研修会では各博物館、美術館がそれぞれの特色や利点を学校教育との連携の取り組みにも活かしている具体例、また様々な問題に対応しながら連携の可能性を広げているお話を伺うことができ、大変貴重な機会となった。また、各博物館・美術館の役割や理念を連携の場でも共有することの大切さを改めて認識することができた。

最後に、ご講演下さった可児館長、事例発表をして下さった藤島様、星子様、西村様、会場設営と運営等お世話になりました愛知県美術館に御礼申し上げます。

(後藤さち子、昭和美術館 学芸員)

本年度の部門別研修会2については、新型コロナウイルス感染症の予防・拡大防止のため、開催を見送った。

表紙館のご紹介

■東浦町郷土資料館（うのはな館）

【開館時間】

9:00 ～ 17:00

【休館日】

毎週月曜日

【入館料】

無料

【所在地】

〒470-2103 知多郡東浦町大字石浜字桜見台 18-4

TEL 0562-82-1188

<http://www.town.aichi-higashiura.lg.jp/soshiki/shogaigakushu/bunkazai/unohana/1461318850602.html>

【交通手段】

駐車場 20 台

- ・ 知多半島道路 東浦知多 I.C. より 東へ 10 分
- ・ J R 武豊線（東海道本線大府駅乗り換え）
石浜駅下車 徒歩 15 分



東浦のはじまり



東浦の移り変わり

「愛知の博物館」 No.111

発行日 令和2年3月31日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒461-8525

愛知県名古屋市東区東桜 1-13-2

愛知県美術館 内

TEL 052-971-5551